JANAMEF
Japan-North America Medical Exchange Foundation
news

Vol. 47
2017.2

■発行年月日／平成29年2月20日
■編集／事務局
■発行／公益財団法人日米医学医療交流財団
〒113-0033 東京都文京区本郷3-27-12-6F
TEL: 03-6801-9777 FAX: 03-6801-9778
E-mail: info@janamef.jp
URL: http://www.janamef.jp

巻頭 Essay

立地から機能へ薬剤師・薬局の原点回帰を目指す

公益財団法人日米医学医療交流財団理事／公益社団法人日本薬剤師会会長
山本（やまもと） 信夫（のぶお）

「777」さて何の数字だろうか？　ある人は飛行機の機種を思い浮かべるかもしれない。また、射幸心の強い人は一昔前の喧騒としたゲームセンターを思い浮かべるかもしれない。

では、薬剤師はどんな連想をするだろうか？　今から777年前と聞いて、即座に1240年に何が起きたかを思い出す薬剤師は、最近ではめっきり少なくなっているように思う。薬剤師が医薬品を扱う専門職として認められ、その専門職として社会に貢献するための勅許状を受けた年が、1240年と記録されており、時の神聖ローマ帝国王フリードリッヒⅡ世が、それまで職人組合（ギルド）として存在した医薬品を扱う職業人を、医師・僧侶や法律家と並ぶProfessionとして「薬剤師」を認め、その薬剤師に医薬品の取り扱い一切を任せることとした。

爾来、欧州では薬剤師は薬局という施設を活用して、地域社会に適切に医薬品を過不足なく、円滑に供給することを本質的な業務とし、その本質業務が社会から適正な評価を受けられるよう、不断の努力と業務の改善を進め、800年近く経った現在でも地域社会から信頼され頼られる存在として機能している。

一方、我が国では、欧州に遅れること650年、かの地の制度を手本に1889（明治22）年に明治政府により薬剤師という職業が創設された。その趣旨は、近代的な医学の導入に伴って、我が国における医薬品の取り扱いを「薬剤師」という専門職に任せることで、国民に提供する医療の安全と安心を確保することにあったとされている。しかし、残念なことに諸般の事情から、その趣旨が我が国の医療現場で普及するにはさらに100年の時間を要することとなった。

多くの開局薬剤師が薬物治療に直結する業務に携わるきっかけとなった1974年から数えて約40年を経た現在、薬剤師や薬局は厳しい社会の視線を浴びている。多くの薬剤師はその働く場所が薬局、医療機関にかかわらず、他の医療職、患者や地域住民から十分に信頼され、頼られるに足る働きをしている。だからこそ、様々な意識調査において薬剤師が「信頼される職業」で「将来なりたい職業」として、医師や看護師等と比べて遜色ない順位に並んでいるに違いないのだが、それと裏腹に何故か社会からの風当たりが厳しい。

2025年の超高齢社会にあって薬剤師・薬局には、地域医療提供体制の中で医薬品の供給に責任を持つ専門職として、多くの期待が寄せられている。その期待に応えるためには、「患者のための薬局ビジョン」にも示されたように、薬剤師が願い、目指してきた「地域に根差した薬剤師・薬局業務」の実現は不可欠のことと考えている。

地域の人々が、「安全で安心して医薬品を使える環境」を確保するという、薬剤師の原点に立ち戻って、立地に依存せず、その機能を発揮し、地域にしっかりと根を張り、いつまでも患者や地域住民からの相談に応じる覚悟をもって業務に取り組むことが、800年の歴史を背負う専門職の矜持と認識している。

山本信夫氏　主な略歴：
1973年　東京薬科大学卒業
1975年　水野調剤薬局入局
1981年　株式会社保生堂薬局入局（～現在）
1998年　社団法人日本薬剤師会常務理事（～ 2006年）
2006年　社団法人日本薬剤師会副会長（～ 2012年）
2013年　公益社団法人東京都薬剤師会会長（～現在）
2014年　公益社団法人日本薬剤師会会長（第25代）
【主な公的・団体・その他・委員歴】
厚生労働省中央社会保険医療協議会委員（2005年9月～ 2009年10月）
アジア薬剤師会連合（FAPA）副会長（2006年11月～現在）
厚生労働省社会保障審議会臨時委員（医療保険部会）（2007年2月～ 2008年3月）
厚生労働省社会保障審議会臨時委員（医療部会）（2007年2月～ 2011年3月）
FIP西太平洋地域薬学フォーラム運営委員会委員（2007年10月～現在）
厚生労働省チーム医療の推進に関する検討会委員（2009年8月～ 2010年3月）
国際薬剤師・薬学連合（FIP）副会長（2014年9月～現在）

2016年度 JANAMEFフェロー決定

Scholarship

A項－留学助成

大沼　哲
群馬大学医学部卒、東京医科歯科大学大学院医療政策情報分野
研修先／分野 University of North Carolina（MPH）
公衆衛生

佐藤敬太
京都大学医学部卒、東京女子医科大学麻酔科学教室
研修先／分野 The University of Western Ontario, Department of Anesthesia & Perioperative Medicine（Clinical Fellow）
心臓麻酔

武田慧太郎
北海道大学医学部卒、札幌徳洲会病院救急総合診療科
研修先／分野 Texas Tech University Health Science Center, Department of Emergency Medicine（Resident）
救急

宮地麻衣
日本医科大学医学部卒、国立成育医療研究センター集中治療科
研修先／分野 UF Health Shands Children's Hospital（Clinical Fellow）
小児集中治療（PICU）

B項－留学助成

工藤大介
東北大学医学部卒、東北大学大学院医学系研究科救急医学分野
研修先／分野 University of California, Department of Anesthesia & Perioperative Care（Postdoctoral Scholar）
革新的脳動脈瘤マウスモデルを用いた
脳動脈瘤発生・破裂の機序解明と治療方法の開発

橋本一樹
横浜市立大学医学部卒、聖マリアンナ医科大学放射線科
研修先／分野 Dotter Interventional Institute（Visiting Scholar）
Interventional Radiologyにおける動物実験の手法

久枝高子
愛知県立総合看護専門学校卒、あいち小児保健医療総合センター看護師
研修先／分野 IAHAIO Conference, Paris
Poster Presentation（犬介在療法（AAT））

医学部夏期集中医学英語研修助成者

安達大揮
北海道大学医学部6年

入江美穂
東京女子医科大学医学部5年

江﨑彩乃
九州大学医学部5年

坂下勝哉
名古屋大学医学部6年

角友理恵
岐阜大学医学部5年

田中有咲
昭和大学医学部5年

種子島七海
東京女子医科大学医学部5年

中島光司
京都大学医学部5年

古田穣
日本医科大学医学部5年

星野奈生子
岐阜大学医学部5年

松井智啓
京都府立医科大学医学部5年

本村朋子
防衛医科大学校5年

アメリカ短期看護研修助成者

青木三栄子
千葉西総合病院

荒川浩美
洛和会音羽病院

小田真里
静岡市立清水病院

金指いずみ
市立島田市民病院

小林祥子
東邦大学医療センター大橋病院

佐藤裕恵
仙台徳洲会病院

西美保
聖隷浜松病院

藤澤知枝美
聖隷浜松病院

牧野はるか
静岡市立清水病院

（注）50音順・敬称略

JANAMEFフェローレポート

アメリカでNPになろうと決意し渡米、目標を達成しスタンフォード大学がんセンターに勤務

濱嶋　夕子

研修先：Duke University School of Nursing（Master of Science in Nursing）
期　間：2014年8月25日～2016年8月16日

2014年8月よりDuke University School of Nursing（Adult Gerontology Nurse Practitioner（NP）with Oncology Concentration コース）に留学し、2016年9月に Master of Science in Nursingの学位取得、試験に合格しAdult Gerontology Primary Care NPの資格を取得しました。

プログラムは1年目にNPにとって基礎となるPathophysiology、Pharmacology、Physical Assessment、研究、NPの役割、公衆衛生などの基礎科目と後半から2年目にかけて専門科目（Primary Care、高齢者ケア及びオンコロジー）の授業と実習の合計46単位（実習760時間含む）が必要でした。授業のペースは驚くほど早く、多くの授業では毎週100ページ以上の教科書や参考文献のReading Assignmentがあり、それに加えレポートの提出、グループワーク課題、プレゼンテーションといつも締め切りに追われており、1年目はあっという間でした。

リサーチ、エビデンスレベルやガイドラインなどRationaleの提示が、ディスカッション、プレゼンテーション、レポートのどの課題においても必須でした。どう引用して論理的に主張を展開すべきか分からず非常に戸惑いましたが、この訓練は後に臨床に出て症例呈示の際に非常に役立ちました。

全般的に、実践的な授業が多く、日本では医学教育で主に用いられる模擬患者を用いたObjective Structured Clinical Examination（OSCE：客観的臨床能力試験／日本の看護教育では導入があまり進んでいない）はPhysical AssessmentやPrimary Careでは単位取得に必須となっていました。OSCEは知識の習得はもちろんのこと、学んだ知識を活かして実践さながらの状況で習得度を判断され知識だけでなく、患者対応などコミュニケーションスキルについても模擬患者さんや講師よりフィードバックが得られる貴重な体験でした。

実習はDuke University系列のClinicとNPが運営するPatient Centered Medical Home Modelを実施しているPrimary Care Clinic、そしてDuke Cancer CenterとUniversity of North Carolina系列のHematology Oncology Clinicと多様な医療環境で実習の機会を得ました。NPの実習は主に患者さんを問診し、アセスメント、鑑別診断をあげて、治療計画を患者さんと一緒に考えることが中心です。臨床推論能力が未熟なこともあり鑑別診断をあげ、治療計画まで限られた時間で検討するというNPの役割は責任が重く難しいものでした。

また、アメリカでの看護師経験がないままプログラムに入ったため、医療システム、電子カルテのシステム、患者さんとのコミュニケーションなどアメリカの医療現場に慣れるのに時間を要しました。しかし、実習は実践重視のため、患者さんをひとりで診察、必要な検査や薬があればオーダーを学生の権限で入力、プリセプターに口頭症例プレゼンテーション、最終的なプランを話し合い・患者教育・記録を実施という一連の流れを繰り返し行い、様々な症例を経験することで、1年の実習の最後には最小限のサポートのみでNPとしての役割を果たせるようになりました。

今後はStanford Cancer Centerの消化器がんClinicにて以前より興味のあったサバイバーシップ外来での業務に従事する予定です。米国での勤務となりますが、今回の留学、今後NPとして従事して得る経験や学びを、日本の医療・看護界にも還元できるよう努力していきたいと思います。最後に、今回の留学を支援してくださった公益財団法人日米医学医療交流財団に心より感謝申し上げます。

大学院修了式にて。いつも勉強会をしていたクラスメートと

JANAMEF Fellow report

JANAMEFフェローレポート

Medical Students, Be Ambitious in Hawaii!

2016年医学部夏期集中医学英語研修プログラム研修報告

本プログラムは、医学英語（Medical English）やケースプレゼンテーション（Case Presentaion）を集中的に上達させるとともに、グローバルな視野を広げる機会を提供し、臨床留学や海外実習参加に必要な能力の育成を目的としています。財団の助成者からの研修報告を掲載します。（全文については、http://www.janamef.jp/fellow/をご覧ください。）

研修期間：2016年8月15日（月）～ 20日（土）（6日間）　主催：Hawaii Tokai International College（HTIC）
研修場所：Hawaii Tokai International College（HTIC）　協力：神戸大学医学部、東海大学医学部

JANAMEF Fellow report

日々成長を実感

安達 大揮（北海道大学医学部6年）

このプログラムで一番良かったのは、ハワイの医学生に問診を行いケースプレゼンテーションの指導を受けたことです。ハワイの医学生との交流はとても新鮮で楽しかったです。ハワイで働いている先生方にケースプレゼンテーションを行い、そのフィードバックをもらうのは、このプログラムでしかできず、大変貴重で有意義なものでした。実際に働いている医師の方々からいただくアドバイスは、的確で鋭いものばかりで、自分の甘さを正してくれる貴重なものでした。フィードバックをもとに日々自分のケースプレゼンテーションを改善していくことで、初日と最終日では比べ物にならないほど成長できました。

大きく自分の夢に近づく

入江 美穂（東京女子医科大学医学部5年）

現地で日本人として活躍されている先生方によるSpecial Lectureは、将来のビジョンを描くために確実に必要な大きな一歩となりました。私自身は今回のプログラムに参加する前から、アメリカで医師として働きたいという大きな夢があり、その果てしなく大きな夢に、現在どうしたらいいのか分からず途方に暮れている部分がありました。しかし、実際に活躍されている先生方のお話を聞くことで、大きく自分の夢に近付けたと感じられ、今後どうしたら良いかも少しずつ見えてきました。さらに、当日のLectureの時だけでなく、その後にも連絡を取らせていただいたり、相談に乗ってもらえたり、今後に繋がる大変貴重な出会いとなりました。

非常に実践的なプログラム

江﨑 彩乃（九州大学医学部5年）

今回の研修に参加したのは、6年次に短期臨床留学を予定しており、その準備のために医学英語を学ぶ場を探していたからでした。学生同士でディスカッションをしたり、ケースプレゼンテーションをしたりと、英語を使うことに重点が置かれており、非常に実践的なプログラムでした。中でも、ハワイ大学の医学生との問診トレーニングが私にとって一番楽しく印象的なプログラムでした。ハワイ大学の医学生にも様々な指摘をいただき、また先生方にケースプレゼンテーションをすることによって、力がついていき、自信も持てるようになりました。

人との出会い

坂下 勝哉（名古屋大学医学部6年）

この研修では全国の留学を考えている医学生だけでなく、ハワイの医学生や海外で働く医師たちとも話をするチャンスがありました。皆それぞれに志や将来の目標があり、話をするのがとても刺激的でした。将来の目標やキャリアプラン、お互いのバックグラウンド、海外で働くということ、英語の勉強の仕方、医師は教育者であるべきだということ、そして時には学生同士くだらない冗談を言い合ったり……多くのことを話し、多くのアイデアをもらいました。机に向かって国家試験の問題集を解くよりも有意義な時間であったと信じています。

一生忘れられない夏の思い出

角 友理恵（岐阜大学医学部5年）

今回、同じような海外留学を目指すたくさんの仲間た

ちに巡り合えたことも大きな財産のひとつです。普段の生活では、どうしても他の大学と深く交流する機会が少ないため、今回集まった九州から北海道までの医学生と出会えたことはまたとない機会です。切磋琢磨したワークショップ、合間のフリータイムで遊んだこと、ハワイの慣れないご飯や寮生活を乗り越えたこと、すべて仲間の存在なしには語れません。一生忘れられないこの夏の思い出を胸に、また夢に向かって頑張ります。

一生の宝物

田中 有咲（昭和大学医学部5年）

研修を終えてまず言いたいことは“参加者の存在”です。将来のビジョンをしっかりと持ったやる気の満ち溢れる方ばかりで驚きました。そのような方々と一緒に授業を受けたり、お話ししたりできたことは私にとって一生の宝物となりました。

この研修を通して、今までの自分がどれだけ“井の中の蛙”だったかということに気付きましたし、モチベーションの高い周りに刺激され、お互い励まし合うことで自分を成長させることができました。今思えばあの時、気持ちが迷いながらも思い切って参加して本当に良かったです。

一層頑張っていこうという気持ちになれた

種子島 七海（東京女子医科大学医学部5年）

このプログラムの良いところは、教授陣の他にも参加者のレベルの高さと多様性もあると思います。まず、今回のプログラムは上級生がかなり多かったため、医学的知識のばらつきがほとんどない状況だったのですぐに症例についてディスカッションを行うことができました。個々の参加者では、USMLEに向かって勉強に励んでいる人、帰国子女の人、団体活動を行っている人、皆英語のレベルを向上させたいという気持ちを持っている人が集まっていました。今回のプログラムにかけている気持ちを聞くことで自分がより一層頑張っていこうという気持ちになれたことが素晴らしかったです。

自分の目で確かめたアメリカの医学教育

中島 光司（京都大学医学部5年）

このプログラムで最も良かったと思うのは、ハワイ大学の医学生との問診トレーニングでした。これは、ハワイ大学生たちが、患者役をやってくださるので、問診を行い、その症例について別室に控える先生方に英語でプレゼンテーションを行うといったワークショップです。もちろん初日は全く歯が立ちません。別室の先生たちには厳しいアドバイスをいただきました。求められているレベルの高さに衝撃を受け、研修期間中は毎晩のように、夜遅くまで同室の子たちと問診とプレゼンテーションの練習をしあったのも今となっては良い思い出です。また、このワークショップは、向こうの医学生と話す絶好の機会でもありました。大学でどのような授業が行われているか、そしてどのような勉強方法をしているか、今回のプログラムで初めて知ることができました。

望んでいた実習

古田 穣（日本医科大学医学部5年）

中でも、毎晩行われるハワイ大学の学生との問診、そして上級医への症例プレゼンテーションの練習はまさに私が望んでいた実習でした。現地の学生・上級医からフィードバックをいただける環境は最高でした。症例プレゼンテーションというものは頭の中に正しい診断プロセスがないと絶対にうまくいきません。曖昧なことを言ったら、ボコボコにされます。1回目のプレゼンで自分の不甲斐なさを感じてから、毎晩その日の症例プレゼンを整理し直し暗記するまで練習して翌日に臨みました。また、上級医の中にはハワイ大学の日本人レジデントも多くいらっしゃいました。フィードバックを聞いたときに、英語が上手すぎて、この先生方は日系の現地の大学出身のドクターなのだと思い込んだほどでした。米国でレジデンシーをするにはこれほどのレベルの英語力が要求されるのかと思い知った瞬間でした。

参加した目的を達成

星野 奈生子（岐阜大学医学部5年）

Programの大まかなスケジュールですが、まず午前中は毎日、寮の隣にあるHTICの校舎で、24名が2班に分かれMedical EnglishとMedical Ethicsの講義を交互に受けました。最終日の午前中はMedical Ethicsの授業中に行ったDiscussionの内容を6班に分かれてPresentationしました。午後からは毎日Honolulu市内に出かけて、市内のClinicやHospital、JABSOM（University of Hawaii, John A. Burns School of Medicine）のCancer Research Centerの見学を行った後、夜からは同じくHonolulu市内にあるJABSOMの校舎でEvening LectureとClinic Practiceの授業を受けました。その他、ハワイでご活躍されている日本人の先生方からご自身のキャリア等についてお話を伺う機会

JANAMEFフェローレポート

もありました。毎日朝8:30から夜21:00まで濃密なスケジュールを過ごすことができ、今回の私の目的は概ね達成することができたと言って間違いありません。

夢のような1週間

松井 智啓（京都府立医科大学医学部5年）

今回1年前から夢見ていたこの研修に参加することができ、この1週間は夢のようでした。これまで学外の実習や勉強会に参加したことのない私にとってこの研修に参加して一番の収穫だったのは、私たちの夢を後押ししてくれる先生方、同じ志を持つ多くの医学生と出会うことができたということです。先生方の期待に応えられるよう、また出会った仲間たちに負けないよう一層勉学に励み、また今回のメンバー間で切磋琢磨し、日本の医療を益々盛り上げて行きたいと思っています。

ArtとScience

本村 朋子（防衛医科大学校5年）

得られたものの非常に多い、充実した1週間でした。

私は医学教育に興味を持っているので、卒後教育のStandardizationであるACGME（Accreditation Council for Graduate Medical Education）のお話が印象に残りました。Art（文系）とScience（理系）のうち、医学はScience だと思われがちですが、Scienceの分野では人間が機械に取って代わられつつあります。そのため、アメリカではすでにArtの部分に重きを置かれる傾向にあるそうです。こういった講義は大変勉強になりました。

プログラムの主な内容

- **Medical English Classes**
  Dr. Doric Little先生からケースプレゼンテーションとは何かを学ぶ。
- **Medical Ethics Classes**
  「医療倫理」について、グループごとに英語で討論を重ね、最終日にプレゼンテーションを行う。
- **Clinic Practice**
  日本人学生2 ～ 3名が1組となりローテーションを組んで、1名のハワイ大学医学部生を問診。同世代の学生同士、コミュニケーション能力を高め、人間的にも刺激しあえる良い機会。
- **Evening Classes**
  医学知識を要する臨床例を英語で討論。
- **Resident Workshop**
  ハワイで活躍する日本人レジデントから体験談を直接聞く絶好のチャンス。
- **Lectures by American Doctors**
  ハワイ大学医学部でPBLを担当する医師から直接話を聞ける絶好の機会。
- **Visit to American Medical Facilities**
  医療機関を見学し、アメリカと日本の医療システムの違いを肌で感じる。

JANAMEFフェローレポート

現地では、OHSU附属ドーンベッカー小児病院、プロヴィデンス・セントヴィンセント・メディカルセンター、カラロガ・テラス高齢者施設、ポートランド大学看護学部ラーニングリソースセンターなどの視察や、アメリカのヘルスケアシステムと看護の展望・チャイルドライフプログラム・マグネットホスピタル・看護教育コーディネーターの役割・オレゴン州尊厳死・リーダーシップ等をテーマとしたレクチャー、ディスカッションに参加しました。財団の助成者からの研修報告を掲載します。（全文については、http://www.janamef.jp/fellow/をご覧ください。）

Inspired by Nursing in the U.S.A!

～ 第13回アメリカ短期看護研修報告 ～

研修期間：2016年10月9日（日）～15日（土）（7日間）
研 修 地：オレゴン州ポートランド市
後　　援：公益財団法人日米医学医療交流財団
企画協力：トータルヘルス教育ネットワーク
現地受入機関：Portland State University (PSU)

一番印象に残ったこと

青木 三栄子（千葉西総合病院）

今回一番印象に残ったことは、アメリカはスペシャリストを育てる教育システムが充実していて、それを支援する職場環境（看護師組合、州の法律、勤務先の経済支援）が看護師たちの仕事に取り組む熱い姿勢と誇りを育てているのだと思いました。その国の風土や文化にも医療は大きく影響を受けるので、すべてを活かすことはできませんが、今回参加した20名の仲間との繋がりやこの研修で得た多くの刺激が今後の私の看護師人生を続けていく上で大きな財産となりました。

モチベーションの高さとバックアップの充実

荒川 浩美（洛和会音羽病院）

私が印象に残っているのは、アメリカの看護師のモチベーションの高さと病院としてのバックアップの充実である。日本では看護師の資格を取得するとそのまま就職し、その後資格更新やさらなるキャリアアップをする人は少ない傾向にある。しかし、こちらでは、看護師の資格だけではなく、学位や修士などさらなる資格取得を行う看護師がほとんどであり、またそれに対する病院からのバックアップが実に充実している。アメリカでは、そういった資格を生かし様々な取り組みがなされており構造・プロセス・アウトカムと、しっかりと計画、実行、評価されていた。それによりスタッフだけではなく患者への満足度の向上や業務改善が行われていた。組織の上層部だけではなく、すべてのスタッフが同じ目標を持ち働いているのだと感じた。

スペシャリストが基本

小田 真里（静岡市立清水病院）

今回の研修で、多くの病院や施設で見学やレクチャーを受けることができました。どこに行ってもホテルのような綺麗さ快適さがありました。アメリカでは、病院は選ばれる時代であり、専門性に特化していなければならないということでした。日本では看護師はジェネラリストで広く浅くというのが基本で数年ごとに異動がありますが、アメリカではスペシャリストが基本です。病棟ごとに就職するため、他の科に行くためには、就職活動か

JANAMEFフェローレポート

らしなければならないそうです。専門性を高めるために努力するのは、当たり前なことという姿勢に、私も頑張らなければならないと思いました。

現地の看護師から日本の看護師は、自分はここができないとか反省から入る人が多いと言われました。私もその一人だと思いました。自分は何が得意なのか、どこに自信があるのかと胸を張って言えるようになりたいです。

素晴らしい学生教育

金指 いずみ（市立島田市民病院）

学生教育について素晴らしいと思いました。看護教育コーディネーターの役割ではポートランドの大学（患者ロボットシミュレーションセンター）を見学しました。実習室に成人・小児・乳児など領域別の人形（患者ロボット）が置いてあり、隣の部屋では教員が監視カメラを見て、学生の行動を見て、教員はマイクで患者の声（症状）をし、血圧・脈・モニター心電図の波形・瞳孔・肺音・腸音などを変化させることができる環境で、学生がどのようにアセスメントをし、行動をしたのか、またその後グループワークで良かった点・悪かった点を出し合い、フィードバックを行う実習をしていました。

私はプリセプター（新人指導）をしていますが、新人は初めて状態変化（急変）した患者を見て、動揺してしまい、うまく対応ができなかったことに対し、自信をなくすことが多いと思います。学生のうちからアセスメント能力をつけ、対応できることで自信につながり、また離職率を防ぐことができます。フィードバックすることも改めて大切であると思いました。

「自由」「尊重」「向上」の精神

小林 祥子（東邦大学医療センター大橋病院）

今回訪問した病院はすべてマグネット認可を受けており、医療者は常に向上心を持ち、職位に関係なく、自分の意見を言い合える環境があった。勉強会も多く、学士修得を目指している人が多かった。また、自分たちの努力の結果を数値化し、掲示をしていた。

病院や高齢者施設はホテルのような雰囲気で、患者も図書館で自分の病気について調べることもできる。入院してくる人種や背景も多様で、多くの宗教イベントが行われており、体格が大きい方にでも対応できる救急車や病室にあるクレーン等も設置されていた。中でも印象に残っているのは、CLS（チャイルド・ライフ・スペシャリスト）の話だ。子どもに実際に人形を触ってもらい、今後の治療に対して理解を深めてもらい、不安を軽減する関わりをしていた。また、医療者や清掃員など皆でカンファレンスをし、多方面で情報を共有することで、よりよい医療を提供していることがわかった。

ハード面での工夫

佐藤 裕恵（仙台徳洲会病院）

私の勤務している徳洲会グループは世界基準のJCI（Joint Commission International）を取得している病院が数カ所あります。当院は老朽化しているため、近い将来建て替えを計画しています。アメリカの病院はどのようにハード面を工夫しているのかということも興味を持っていました。どの病院もセキュリティ対策がされていました。採光や家具、掲示物などは高級ホテルに来たかのような癒やしのある構造でした。また、安全対策では薬品の管理が厳重で指紋認証であること、ICUの医療機器が一つのタワーで管理できるようになっていました。連絡方法もPHSではなく、手を使わない声認証のボイスエラーを使用していました。これは感染対策上からも汚染された手で電話を取ることがないため、有効な方法だと思いました。また、職場環境として労働者の負担軽減のために体位変換するためのリフト設置や白衣の交換システムなどを見ることもでき、新病院建設時の参考にできることが多々ありました。

看護師の向上心

西 美保（聖隷浜松病院）

何よりアメリカの看護師の向上心には驚かされた。妊娠中に資格を取得し、子育てをしながら新しい分野への挑戦まで考えているのだ。そうさせるだけ看護師の地位や報酬は高く、能力をつければ評価され、スキルアップの支援体制が充実していた。病院は良いスタッフを留めておきたいので、進学するための勉強会から学費まですべてバックアップしどんどん勉強に行かせるそうだ。こ

のような体制にするにはどうすればいいか。

形に表わすのが難しい看護を数値化し、アピールすることでサポートを得てきたと言っていた。私が働いている病院でも看護指標を作成し看護の可視化に取り組んでいる。ただし、訪問した病院では簡単にデータ化できる仕組みができており、看護師の過剰な業務にはなっていないとのことでそのような仕組み作りや、改善されれば報酬など分かりやすい形で評価されることも可視化への意欲の促進に必要だと思った。

質の向上と患者満足度

藤澤 知枝美（聖隷浜松病院）

驚いたことは、産休中に修士を取得した人もいてスタッフの向上心とそれを金銭的にバックアップする病院（修士・博士などへの進学費用は病院がすべて負担してくれるという）の体制は、より知識を持ったスタッフが増えることで病院内のスタッフの質の向上につながりひいては病院自体の質の向上、患者満足度が高くなる評価につながる。そのようなよいサイクルができている。

「看護師」は社会的にステータスがあり、個々人の能力によって報酬も変わってくる。土日出勤の手当もあるし、頑張れば頑張った分だけ賃金という目に見える形で自分に返ってくる。いろいろとシステムは違っていて羨ましいと思う反面、今の日本の診療報酬制では病院の収入が決められているため、無理だと諦めたりもする。今の日本の国民皆保険を保ちながらアメリカのようになれればベストだと思うのだが。

尊厳死について学ぶ

牧野 はるか（静岡市立清水病院）

研修先のポートランドで尊厳死について学ぶと共に、死についてもゆっくり考える機会になりました。講師の方が関わった患者さんの事例で、前立腺癌で長期放射線療法を行い、強い嘔気が出現しホスピスが導入されましたが、初めて会った際に「苦しくて苦しくてもう死にたい。この吐き気が良くならないと自分の頭を銃で撃って死ぬ」と言われたそうです。もし初めて会った患者さんにこのようなことを言われたらどうしますか？と問われた際、私はどう答えてよいかわかりませんでした。

私の病棟では終末期の患者さんが少ないため、死についてきちんと考えたことがなかったと思いました。自分自身を知り、終末期で苦しむ患者さんの思いや苦しみを、なんの偏見もなく平らな心で受け止めるよう努めたいと思いました。また、アメリカでは終末期になってから緩和ケアを導入するのではなく、病気の診断を受けた時点から緩和ケアが導入されると聞き、日本と大きく異なる点だと思いました。自分の勤める病棟でも、癌患者さんが多く入院しているため、癌と診断された後から今後どのような治療を行い、どのように生きていきたいかなど患者さん自身の思いを尊重していきたいと思いました。

第17回
医学留学
セミナー

Let's go "Ryu-gaku"！ 留学のススメ!

日時：2016年10月8日（土） 12:30〜18:00
場所：九州大学 病院地区 コラボステーション I 2階 視聴覚ホール
主催：公益財団法人日米医学医療交流財団
共催：九州大学
後援：文部科学省、厚生労働省、（公社）日本医師会、（公社）日本看護協会、（公社）日本薬剤師会（公社）福岡県医師会、（一社）福岡市医師会

コーディネーター ▶▶▶
住本　英樹（九州大学大学院医学研究院長／九州大学大学院医学研究院生体制御学講座生化学分野教授）
小池　　薫（JANAMEF理事／京都大学大学院医学研究科初期診療・救急医学教授）

2016年10月8日（土）、医学留学セミナーが九州大学・病院地区で開催され、登壇者18名、受講生73名（医学生39名、研修医6名、医師12名、高校生8名、その他8名）合わせて91名が参加しました。

九州大学大学院・住本英樹医学研究院長のご挨拶の後、〈第1部〉のセッションに入り、まず、心臓血管外科・塩瀬明教授に、強い心構えを持ってハードワークをすれば、アメリカ留学から大きな成果が得られることをお話しいただきました。次の厚生労働省・入江芙美先生には、行政官長期在外研究員制度を利用してフランスに留学した体験を踏まえつつ、日本に居る時とは異なった視座で世界を理解することの面白さを話していただきました。そして、国際医療部・清水周次教授からはインターネットを利用して海外57カ国と日常的に英語の教育プログラムを行っていることなどを紹介していただきました。

休憩をはさんで〈第2部〉のセッションに移り、カプランの平間健治氏から、USMLEの基礎から最新情報まで、具体的に分かりやすくお話しいただきました。また、消化器・総合外科大学院生の別城悠樹先生には、Step2CSを2度目で合格した経験から、初回の受験対策の反省点と具体的な対策法を伝授いただきました。

〈第3部〉のセッションは「短期留学」報告です。九州大学医学部医学科6年生の長澤巧多君、坂口嘉彬君、消化器・総合外科の藤本侑希子先生にお話をいただきました。

今回初めての試みが高校生への呼びかけでした。参加した8名の高校生が全員最後まで熱心に聞き入っていたのが印象的でした。

最後になりましたが、セミナーの企画をしてくださいました九州大学大学院・住本英樹医学研究院長、医学教育学分野・菊川誠講師はじめ、九州大学の皆様に心より感謝申し上げます。（小池）

プログラム

第1部　医師の国際的活動

【司会】**北園　孝成**（九州大学医学研究院病態機能内科学分野教授）
伴　信太郎（JANAMEF理事長／名古屋大学大学院総合診療医学講座教授）

●米国における心臓血管外科医の経験
【講師】**塩瀬　　明**（九州大学病院心臓血管外科教授）

●医系技官としてのフランスへの留学
【講師】**入江　芙美**（厚生労働省大臣官房厚生科学課課長補佐）

●日本に居ても海外気分：遠隔コミュニケーションのすすめ
【講師】**清水　周次**（九州大学病院国際医療部教授）

―― パネルディスカッション ――

第2部　USMLE受験を目指して

【司会】**菊川　　誠**（九州大学大学院医学教育分野講師）
小池　　薫（JANAMEF理事／京都大学大学院初期診療・救急医学分野教授）

●USMLE試験対策の現状
【講師】**平間　健治**（（株）シェーンコーポレーションカプラン お茶ノ水センターメディカル・カウンセラー）

●米国で臨床医になるために〜 USMLE合格への秘策〜
【講師】**別城　悠樹**（福岡市民病院医員／九州大学大学院消化器・総合外科大学院生）

―― 質疑応答 ――

第3部　学生の海外短期留学プログラムの現状と展望

【司会】**高橋　富美**（九州大学大学院国際医科学教育ユニット講師）
野村　　実（JANAMEF理事／東京女子医科大学医学部麻酔科学教室教授）

●韓国釜山大学校　短期留学報告
【講師】**長澤　功多**（九州大学医学部医学科6年生）

●グーテンベルク大学麻酔科　短期留学報告
【講師】**坂口　嘉彬**（九州大学医学部医学科6年生）

●クリーブランドクリニック移植外科　短期留学報告
【講師】**藤本侑希子**（九州大学病院消化器・総合外科）

2016年医学留学セミナー アンケート集計結果

73名中43名回収（回収率59%）

海外留学に対して明確なイメージを持つことができた、USMLE受験に向けて具体的な内容が分かりとても良かったという感想を多数いただきました。これらの感想・意見等は次回以降のセミナーに活かしていきたいと思います。

1. 役　職

[1] 医師 7名（16%）　[2] 研修医 5名（12%）
[3] 医学生 24名（56%）（うち6年 1名、5年 11名、4年 2名、3年 3名、2年 4名、1年 3名）
[4] 高校生 4名（9%）　[5] その他 3名（7%）

2. 参加した意義

5	4	3	2	1
非常に有意義	有意義	普通	改善の余地あり	参加しない方がよかった
28名(65%)	12名(28%)	1名(2%)		

※ 不明 2名(5%)

3. 全体の感想

- 今後どのように留学を目指して具体的に活動していけばよいかが分かった
- 留学への具体的な道筋のイメージが前よりもできた
- 海外留学に対して明確なイメージを持つことができた
- 今まで漠然としていた留学に対するイメージが形になったように思う（高校生）
- 実際に留学を経験された先生方のお話を伺いモチベーションが高まった
- 医学部進学を希望する身として大変モチベーションが上がった（高校生）
- 留学することによってどのようなことを得られるのか、また、将来の海外での就職の良さなどを詳しく知ることができた
- 米国留学等のメリット・デメリットなど、USMLEの詳しい話を聴くことができた（高校生）
- 留学に関する周辺知識だけでなく、それを目指す人たちから刺激を受けた
- 本やインターネットでは得られない生の情報がたくさん聴けた
- 留学について様々な側面から情報を得ることができた
- 実際に USMLE を受験された先輩の話を聴くことができた
- USMLE 受験に向けて具体的な内容が分かりとても良かった
- 第3部の先輩方の研修についてはイメージしやすく、「海外に出ることで何かを学び取ろう！」という気持ちこそが大事なのだということが分かった

4. 今後の海外留学の希望

[1] 有無
①あり　38名（88%）　②なし　3名（7%）　③不明　2名（5%）

[2] 目的（複数回答）
①臨床研修　22名（31%）　②臨床研究　13名（18%）　③臨床実習　11名（15%）　④基礎研究　11名（15%）
⑤語学　8名（11%）　⑥基礎配属　4名（6%）　⑦大学院　2名（3%）　⑧人生経験　1名（1%）

5. 留学に際し困ること（複数回答）

[1] 経済面　13名（35%）　[2] 言葉　11名（29%）　[3] 生活・文化　4名（11%）
[4] 帰国後のキャリア　2名（5%）　[5] 留学手続　2名（5%）　[6] USMLE　1名（3%）
[7] 時間　1名（3%）　[8] モチベーションの維持　1名（3%）　[9] 経験談が少ない　1名（3%）
[10] 周囲の理解　1名（3%）

6. 今後取り上げてほしいテーマ、内容

- 米国の医療・保険制度
- 米国でのレジデント、フェローの中身
- 米国だけでなく欧州の留学・医療について
- 医療英語の講座
- 留学に伴う具体的な事務手続、試験、審査について
- USMLEの具体的な勉強方法をもう少し聴きたかった
- 低学年向けのUSMLEの具体的な勉強方法
- 留学プログラムの紹介
- 学部在学中に可能な留学について
- 様々な診療科の先生の話を聴きたい
- 女性医師について（高校生）

7. その他意見等

- もっと早くこのようなセミナーがあるのを知っていれば良かったと思う
- 今回のプログラムは、医師・医学生でもない自分にとっても本当に魅力的だった
- 大阪で開催してほしい

JANAMEF
プロジェクト

海外留学支援プロジェクト

日米医学医療交流財団では「グローバル医療人」の育成に向け海外留学支援プロジェクトに取り組んでいます。

趣　旨

海外留学支援のノウハウを持つ財団は、地域医療を担う公益性の高い医療機関が実施する「医師海外留学助成制度」を支援します。

助成対象者は米国他にレジデント留学を希望する医師で、連携対象の医療機関（公的医療機関や社会医療法人が運営する医療機関）は当該医師を雇用し、海外へ留学派遣します。

医療機関にとっては、

（1）喫緊の医師補充が可能となる
（2）海外留学を実現した医師による臨床研修指導が可能となる
（3）地域医療が活性化されるとともに、当該医療機関も研修病院として活性化される

などの成果が期待できます。

財団は、「海外留学支援プロジェクト」を実施したい医療機関を公募しています。
http://www.janamef.jp/spt_pgm/spt_pgm_a/
をご覧ください

概　要

1．連携対象医療機関が医師を雇用し、留学派遣します。

（1）助成を希望する医師は、
① 留学前2年間当該医療機関に勤務します。
② 留学終了後最低1年間当該医療機関に勤務し、研修指導を担当します。

（2）当該医療機関は
① 留学前2年間助成を希望する医師を常勤医師として雇用します。
② レジデント留学中の3年間：300万円/年の留学助成をします。
③ 留学終了後最低1年間は助成を受けた医師を常勤医師として雇用します。

＊1）原則として留学先は助成を希望する医師が各自で確保します。
＊2）上記は、臨床留学の場合を想定した基本型ですが、研究留学やMPH留学の場合は、勤務期間・留学期間が異なることがあります。

2．連携対象医療機関は日米医学医療交流財団の団体賛助会員となります。

賛助会費
① プロジェクト開始以降　毎年：1口10万円以上
② 助成を希望する医師が勤務開始以降、勤務終了（または一定の勤務期間）まで1名につき毎年：5口50万円/年

3．日米医学医療交流財団は次の役割を担います。

（1）医療機関に対する留学支援スキームのコンサルテーションを行います。
（2）プロジェクトにより海外留学する医師の公募の窓口となります。
（3）海外留学する医師の選考を担当します。
（4）留学生のための留学準備、留学中の支援を行います。
（5）医師の雇用に関する役割は担いません。

4．プロジェクト開始前に次のことが必要です。

（1）財団による施設視察
（2）財団と医療機関の理事長・病院長との面談
（3）財団と臨床研修委員長との面談

実施中の連携医療機関

助成を希望する医師は、以下にお問い合わせください。

橋本市民病院（和歌山県）
「大リーガー医育成プロジェクト」

問い合わせ先
事務局　TEL：0736－34－6123
E-mail:shomu@city.hashimoto.lg.jp
http://www.hashimoto-hsp.jp/news/majorleaguerdoc.html

社会医療法人ジャパンメディカルアライアンス（神奈川県）「JMA国際標準医育成プロジェクト」

問い合わせ先
JMAグループ医師採用担当
TEL：046－231－8577
E-mail:jinzai@jin-ai.or.jp
http://job.jinai.jp/ryugaku.html

問い合わせ先
公益財団法人日米医学医療交流財団 事務局
〒113-0033　東京都文京区本郷3-27-12　本郷デントビル6階
TEL：03-6801-9777　E-mail:info@janamef.jp　http://www.janamef.jp

JANAMEF
プロジェクト

臨床教育プロジェクト

日米医学医療交流財団では「グローバル医療人」の育成に向け臨床教育プロジェクトに取り組んでいます。

趣　旨

海外研修中（修了）の日本人医師や海外の臨床研修指導医などに幅広いネットワークを持つ財団は、公益性の高い医療機関と連携して「海外でトレーニングを受けた臨床指導医による臨床教育プロジェクト」を実施します。

医療機関にとっては、

（1）「海外でトレーニングを受けた臨床指導医」による指導が可能となる

（2）このような研修機会を提供することによって、当該医療機関が研修病院として活性化される

（3）海外留学を希望する医学生・若手医師に対する留学情報提供が可能となる

などの成果が期待できます。

対象となる医療機関は、原則として大学病院・臨床研修指定病院です。

財団は、「海外でトレーニングを受けた臨床指導医による臨床教育プロジェクト」を実施したい医療機関を公募しています。

http://www.janamef.jp/spt_pgm/spt_pgm_b/ をご覧ください

概　要

1．「海外でトレーニングを受けた臨床指導医」の受入を希望する医療機関は財団に登録します。本プロジェクトでの「臨床指導医」は、来日を予定している海外在住の日本人臨床指導医です（以下同じ）。

（1）登録医療機関は、

① 下記の情報を財団に登録します。

1）医療機関名　2）住所　3）電話番号

4）連絡窓口責任者氏名

5）E-mail address　6）電話/FAX番号

② 希望する企画（日本語・英語のどちらでも可）を財団に登録します。

1）専門領域　2）講演と質疑　3）症例検討

4）教育回診　5）その他（具体的に記載）

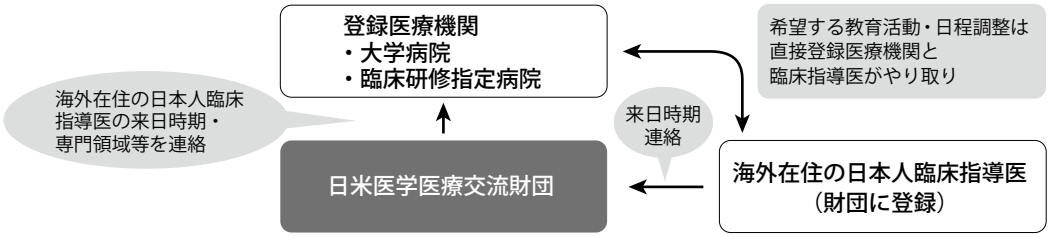
（2）登録医療機関は、「海外でトレーニングを受けた臨床指導医」の受入費用（国内旅費・滞在費・謝金等）を負担します。

＊同時期に複数の医療機関が同じ臨床指導医による指導を受ける場合は、費用を分担して負担します。

2．「海外でトレーニングを受けた臨床指導医」の受入を希望する医療機関は、財団の団体賛助会員となります。

賛助会費　登録時以降　毎年1口10万円 以上

海外でトレーニングを受けた臨床指導医による臨床教育プロジェクトの構図



日米医学医療交流財団の果たす役割

1．臨床指導医に係る情報（来日時期、専門領域、卒後年次等）を登録医療機関へ適時に提供します。

2．プロジェクトにより派遣される臨床指導医の窓口となります。

3．その他、登録医療機関からの海外留学に関する相談に応じます。

「海外在住の日本人臨床指導医」や「海外在住の日本人臨床指導医」の受入を希望する医療機関は、下記にお問い合わせください。

問い合わせ先

公益財団法人日米医学医療交流財団 事務局

〒113-0033　東京都文京区本郷3-27-12　本郷デントビル6階

TEL：03-6801-9777　E-mail:info@janamef.jp　http://www.janamef.jp

Medical English

小林恵一先生の医療英会話　シリーズ第9回

医師・患者関係について

今回はアメリカにおける医師・患者関係について学びます。

医師は患者の病態に責任を取らされます。一回も診察したことがない相手は患者ではないのは自明です。では、診察を受けようと出かけて来た人が心筋梗塞でバタッと倒れることを想定してみましょう。医師にかかろうとして車に乗った段階では、まだ患者ではありません。建物に到着しても、まだ患者ではありません。診察を受けるため、建物に入り医師の部屋のドアの前で倒れても医師・患者関係は成立しません。では、ドアを開けて足が敷居の線を1センチでも越えて医師のオフィスに入り、そこで倒れたらどうでしょう。これは医師・患者関係が成立したと看做され、適切な治療をしたかどうか責任を問われてきます。

では、患者が敷居のところで倒れていて、心筋梗塞とは考えず、ちょっと具合が悪いんだろう程度に考え、椅子に座らせしばらく休ませているうちに死亡した場合、裁判で問われる罪はClinical Incompetenceと言います。この罪状は、医師がPracticeを続けていくに足る臨床的判断力を持っていないという意味で、医師を続けるかどうかの大問題です。

アメリカでは、日本も最近はそうですが、医師免許とは別に内科や外科のBoardの資格があります。Boardの試験は難しく、合格してもある一定年数で失効し再び受験しなければなりません。私が持っている内科のBoardは、今までは10年に1回大試験があり、Boardの資格を維持するためには受験しなければなりませんでした。実は、昨年私はBoardが切れたので2月に受験しました。まあ、忙しい診療の合間に受験勉強は大変でした。しかし、Boardを更新していないと、上記のような場合不利になります。裁判になった場合、相手の弁護士が最初に聞くのはBoardの有無です。

「Dr.小林、あなたはBoardを持っていますか？」

もし、持っていない場合、

「なぜ、Boardを持っていないのですか」

と聞かれ、

「Boardの試験を受けましたか？　その結果は？」

もし、落ちていようものなら、

「え？　結果についてよく聞こえませんでしたので、もう一度ゆっくり大きな声でお答えください」

とやられてしまいます。

ちなみに、ACP（American College of Physicians：アメリカ内科学会）は10年に1度の大試験のほかに、5年に1度の中試験、2年に1度の小試験という3つの更新方法を発表しました。でも、どの受験で更新するにも勉強して試験を受けなければならないのは一緒です。アメリカで医師を続けるのは本当に大変です。

さて、心筋梗塞の患者を入院させICUに入れたのですが、心肺停止となり、ナースが緊急に連絡しても忙しくて適切な処置ができなかった場合、もしくは面倒くさくて無視していた場合は、Medical Negligenceという罪になります。On Callの日に当直室に居なければならないのに、自宅に帰り酒を飲んで緊急事態の対応ができなかった場合もそうです。Incompetenceは無能で頭が悪いという意味で、Negligenceは頭はいいかもしれないが、怠け者であるという意味です。

（続きは財団HPにてご覧ください）

小林　恵一（こばやし・けいいち）
ハワイ 聖ルカ・クリニック院長、
神戸大学医学部臨床教授
公益財団法人日米医学医療交流財団評議員／
JANAMEF Fellow
1980年東京大学文学部西洋史学科卒業、1988年神戸大学医学部卒業。1990〜93年南カリフォルニア大学ハンティントン記念病院内科レジデント、ハワイ大学内科レジデント。東京八王子東京天使病院内科部長、御代田中央記念病院副院長を経て、1997年米国ハワイ州ホノルルにて開業。2014年より財団（JANAMEF）評議員。

JANAMEF 支援業務 実施報告

茨城県指導医団 国外派遣事業支援業務実施報告

財団では、医学医療の国際交流を支援してきたこれまでの実績をもとに、地方公共団体に対する支援業務として、3回目の茨城県指導医団国外派遣事業支援業務を実施しました。本事業は、茨城県内の指導医の更なる指導能力の向上を図るため、意欲ある指導医団を米国（ハワイ）に派遣し、当地の医療現場や医療施設などで、先進的な指導・教育方法を学ぶものです。財団では、派遣プログラムの作成からその実施まで一貫した業務を支援しました。その概要を以下のとおり報告します。

研修期間：2016年11月14日（月）～23日（水）（10日間）
研　修　地：米国ハワイ州ホノルル市
主　　催：茨城県保健福祉部 医療対策課医師確保対策室
企画・実施支援：公益財団法人 日米医学医療交流財団

支援事業の概要

●事業の目的

県内の指導医の更なる指導能力の向上を図るため、意欲ある指導医団を結成し、世界標準の先進的な指導・教育に取り組んでいる米国（ハワイ）に派遣することで、スキルの向上と県内研修体制の強化を推進し、「若手医師教育研修立県」としてのイメージの向上及び医師の県内定着を目的とする。

●支援業務の内容

① 指導医団国外派遣プログラムの作成
② 出発前の準備（オリエンテーションを含む）
③ 派遣先でのプログラムの実施
④ 必要物品並びに手続きの手配及び支払い

●支援期間

平成28年5月17日～平成29年1月31日

●主な研修内容

① 外来・救急等でのレジデントへの指導方法
② ベッドサイドにおけるレジデントへの指導方法
③ カンファレンスにおける指導方法
④ 医師のプロフェッショナリズム（マナー・接遇・倫理）

プログラムの主な内容

●聖ルカ・クリニック研修
●ワイキキ緊急医療クリニック研修
●クイーンズメディカルセンター
レジデント教育システム、モーニング&エデュケーショナルカンファレンス、モーニングレポート、レジデント病棟回診、ヌーンカンファレンス、グランドラウンドレクチャー
●カピオラニコミュニティーカレッジ（KCC）
Ho'okipa Me Ke Aloha Workshop, Health Science Programs Tour, Gerontology, Community Health, Castle Medical Center Services Visit
●ハワイ大学・ジョンA.バーンズ医学部SimTikiシミュレーションセンター：シミュレーション教育
●ハワイ大学・ジョンA.バーンズ医学部訪問（井筒副学長・町教授レクチャー&視察）
●レジデント（JANAMEF Fellow）訪問&日・ハワイ医療交流
●在ホノルル日本国総領事館訪問

SimTikiシミュレーションセンターにて

KCC修了式にて

事務局だより

Activities

未来に向けて拓こうJANAMEFネットワークを
～第6回賛助会員交流会～

日米医学医療交流財団では、当財団を支えていただいている会員の皆様の交流の場を開き、会員の親睦を深めるとともに、当財団関係者との意見交換・情報交換を図ることを目的に定期的に交流会を催しております。

2016年10月15日（土）開催の「第6回JANAMEF賛助会員交流会」には、多数の方々が参加くださいました。今回は、グローバル化した社会において活躍する人材を育成することが喫緊の課題となっていることを踏まえ、前フルブライト・ジャパン事務局長/JANAMEF選考委員のDavid Satterwhite先生より「グローバル化と変わりつつある日本――海外留学トレンドと将来への意味合い」をテーマに、また、4年後の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を控え、国立スポーツ科学センターセンター長の川原貴先生より「日本におけるスポーツ医・科学とオリンピック」をテーマに特別講演を賜りました。リオデジャネイロオリンピックでの日本選手団のメダル獲得数が史上最多の41個となった背景の話や2020年の東京オリンピックに向け英語で医療サポートを行う医学生有志団体Team Medicsのメンバーによる活動紹介などがあり、話題の尽きない交流会となりました。歓談では、会員の皆様と当財団関係者との交流の輪が広がりました。

賛助会員交流会式次第

◆来賓挨拶

財務省主計局総務課長　角田　隆

厚生労働省医政局長　神田　裕二

◆特別講演

「グローバル化と変わりつつある日本――海外留学トレンドと将来への意味合い」

前フルブライト・ジャパン事務局長/JANAMEF選考委員　David Satterwhite

◆特別講演

「日本におけるスポーツ医・科学とオリンピック」

国立スポーツ科学センターセンター長　川原　貴

特別講演：川原　貴氏

特別講演：David Satterwhite氏

Team Medicsのメンバー

編集後記

本号では、“海外留学支援プロジェクト”と“臨床教育プロジェクト”の紹介記事を掲載してあります。最近の世界的な潮流として反グローバリズムの動きが見られますが、患者や病気が国境を越える時代において「グローバル医療人」の育成が重要な課題となっています。今回、パスポートシリーズ第16巻『看護留学へのパスポート―専門職の道』の刊行に併せて、しばらく中断していました看護職向けの医学医療交流セミナーを9年ぶりに復活して開催することになりました。2018年10月に財団設立30周年を迎えるに当たり、財団に課せられた使命を着実に果たしていけるよう初心に帰って取り組んでいく所存ですので何分のご支援を賜りますようお願いいたします。（事務局長　坂上正人）